

# アレキサンダー大王がディオゲネスを訪れる

## シャーンバヴィー・クリスチャンによる再話

ほとんどの日々、ディオゲネスは彼のお気に入りの居住空間、大きな土のたるの中でくつろいでいました。これが、古代ギリシャの最も有名な哲学者の一人がほとんどの時間を過ごすやり方でした。コリント郊外の、横にしたたるの中に座り、土地の犬たちを仲間にして、人生についてのあらゆる疑問に対する答えを求めてやって来る、絶え間ない訪問者たちを受け入れていました。

なぜ、たるなのでしょう。そう、これはディオゲネスの単なる奇癖の一つに過ぎませんでした。彼はその英知が評価されるのと同じくらいに、その型破りな振る舞いには、好奇と恐れの目が向けられました。例えば、ディオゲネスはいかなるぜいたくも拒絶し、必要最小限の物だけで暮らしていました。彼はしばしば極端なことをして、他者への手本を示しました。それ故に、たるなのです。

ディオゲネスは、幸福は本音で生き、真実を語る、個人の自由の中に見いだされると信じていました。彼は、道を歩いては擦れ違う人々の顔をランプやろうそくで照らし、正直な人——真の人類の模範——を探しているのだとすることで知られていました。

当然のことに、この普通ではない師の言葉は、王国の統治者であるアレキサンダー大王にも伝わりました。この生意気で若い征服者は、20歳で国王の地位に上り詰め、世界で最大の帝国の一つを築き上げることに取り掛かりました。しかし、その見た目の、とどまる所を知らない野心と無敵の力とは対照的に、アレキサンダーは哲学にも終生の興味を持っていました。彼は、現実の本質を学ぶことを望んでいたのです。

アレキサンダーが国王になるや否や、王国中の哲学者や政治家がアテネの彼の宮廷に集まり始め、彼の前で頭を下げ、豪華な贈り物と称賛でご機嫌を取りました。そのような訪問者たちを通じて、アレキサンダーはディオゲネスのことを聞き知ったのでした。その若者は興味をそそられました。彼は、ディオゲネスも宮廷にやって来るだろうと期待して待っていました。彼は待つて、そして、待ちました。

しかし、その老哲学者は、新たな統治者に少しも関心を持ちませんでした。ディオゲネスはずっとコリントにいて、たるの中で幸せに毎日を過ごしていました。

アレキサンダーはついに、敬意を表す唯一の手段はコリントへ出掛けていくことだと決断しました。ある日、彼は王家の従者たちと共に出発しました。道中、彼の相談役は、面会に備えて言いました。「陛下、ディオゲネスは大変な変わり者です。つむじ曲がりです。彼は社会規範を受け入れません。富と権力をひどく嫌います。暮らしているのはたるの中です！ 彼が何を言うか、何をするか、分かったものではありません」

しかし、注意を促す進言はどれも、王の興味をかき立てるだけでした。

さて、まさしくその日に、ディオゲネスはたるから出て、暖かなギリシャの太陽の光を浴びるために道の脇で横になると決めました。彼が満足して眠りに落ちようとした時、近づいてくる行列の音——ラッパとバグパイプのファンファーレ、太鼓のリズム、そして土の道で馬のひづめが立てる地響き——が聞こえてきました。

ディオゲネスは片肘立てて体を起こし、道の向こうをのぞきました。もうもうとした土ぼこりの真ただ中に、宙を舞う王の旗が見えました。彼はまた横になりました。

王と従者たちがその哲学者の休んでいる場所に近づくと、衛兵の一人が、「陛下のおなり！」と、大声で言いました。一行は止まりました。アレキサンダー王は馬から下り、あおむけでいる男に大股で歩み寄りしました。

ディオゲネスは自分の前に立っている若い君主を見上げました。立派なマントと輝くかぶと、堂々とした身のこなしを見て取りました。

アレキサンダーはディオゲネスに敬意を表すると、言い放ちました。「私はアレキサンダー、偉大なる王です！ あなたに会い、あなたから知識を得るために、アテネの私の王宮からはるばるやって来ました。まず最初に、あなたに尋ねたい。何か私から欲しいものがありますか？ この王国のものはすべて私の思いのままです。あなたに与えることができるもの、あなたのためにできることは、ありますか？」

「そう、ある」と、ディオゲネスは答えました。

王は期待感で息をのみました。

「脇に寄ってもらえないだろうか。分かるかね。私は暖かなギリシャの太陽で日光浴をしている。そして、あなたはその太陽を遮っている」

一行は、あぜんとして静まりかえりました。

何秒かの後、王のエゴはディオゲネスの指示の一撃から立ち直り、彼は黙って脇に寄りました。彼が道を空けるや否や、もう一度栄光に満ちた太陽の光線は哲学者の上に注ぎました。その目は優しい喜びでキラキラ光っていました。

アレキサンダーはディオゲネスに別れを告げて、隊列は帰途に就きました。彼がこの出会いと受け取った知識を振り返れば振り返るほど、この並外れた師への感嘆はより一層大きくなりました。

旅の間、アレキサンダーは従者たちがあの年老いた男をばかにしたりあざ笑ったりするのを耳にしました。王は彼らに向かうと言いました。「もし私がアレキサンダーでなかったら、私はディオゲネスになりたい」

ディオゲネスが後になってこのことを聞いた時、彼は言いました。「もし私がディオゲネスでなかったら、私はやはりディオゲネスになりたい」

